

## 【若狭 不老不死伝説と空海】

(2010年4月1日刊行『レイラインハンティング』より抜粋)

### ●八百比丘尼●

古来、若狭は大陸や朝鮮半島からの海の玄関として、様々な国の人々や文物が行き交う場所だった。その若狭の遠敷(おにゅう)という山間の里に、高橋長者という裕福な庄屋があり、15歳の娘がいた。

ある日、どこからともなくこの地へやって来て、大きな屋敷を構えた老人があった。白髪白髭の老人は、様々な国の言葉を操り、いったいどの国の出身なのか、歳はいくつになるのか定かではなかった。

ある時、老人は、若狭の長者たちを宴会に招待する。

見たこともない山海の珍味が並ぶ食卓に招待された長者たちは目を見張る。そして、老人の歓待に誰もが心を許す。ところが、一人の長者が屋敷の中で迷い、たまたま厨房を覗いてしまう。そこでは、頭と上半身は人間の女の子で下半身は魚の「人魚」が解体されていた。それを見た長者は、血相を変えて仲間はそのことを耳打ちする。その話を聞いた長者たちは、誰も珍味に手を出さなかった。

「せっかく、世にも珍しい人魚の肉を振る舞ったのに、残すとはもったいない」

と、老人は長者たちに土産として持たせる。

ほとんどの者は、気味悪がって土産の肉を海に捨ててしまった。ただ一人、高橋長者だけが、それを持って帰った。しかし、持って帰ってはみたものの、やはり気味が悪く、手をつける気にはなれない。その肉を翌日には捨てるつもりで、無造作に厨房に置いた。

老人の宴が気になっていた高橋長者の娘は、厨房で土産を見つけ、それをこっそり食べてしまう。その肉は、この世のものとは思えぬ美味で、娘は全て平らげてしまった。

この日から、娘は歳をとらなくなる。

他の者たちが老いてこの世を去り、さらにその子孫たちがこの世から去っていても彼女には老いは訪れない。いつまでも若狭の海のような美しさと輝きを保ったまま、彼女は、朽ち果ててゆく人と物の定めを哀しく見送り続けるしかなかった。ただ彼女の心だけが、疲れ果て、枯れていった……。

それが、若狭小浜に伝わる「八百比丘尼」の物語だ。

少女は自らの肉体の死をひたすら追い求め、諸国を行脚する。そしていつしか比丘尼となって、死に行く定めの人々に安らかな彼岸への引導を渡すようになる。死に直面して恐れ慄く人々は、比丘尼の中に永遠の生の哀しさを感じ取り、安らかに死出の旅へと向かう決心をつける。そして、無数の死を看取った比丘尼に抱かれながら旅立っていく。

比丘尼は、そうして諸国を巡りながら、自分が幼少の頃から好きだった白椿を訪ねた土地に植えていく。比丘尼となった少女は、人魚の肉を食べてから八百年の間そうして諸国を巡り歩いた。そして、巡り巡って生まれ故郷の若狭に辿り着く。

比丘尼は八百年前と変わらぬ自らの故郷の景色に自分の数奇な運命を重ね合わせる。

「自分はこの景色の一部となろう……」

そう決心した比丘尼は、死を求めることを止め、心落ち着けて懐かしい若狭の海が見える洞窟に籠もることにする。洞窟の入り口には大好きな白椿の木を植え、椿の花と青い若狭の海とを愛でながら暮らすうち、比丘尼は止まっていた時間を取り戻し、若い、肉体が朽ち、風に飛ぶ砂と化した。そして、ようやく願いがかなった彼女の澄み渡った魂は天上へと登っていった。小浜市街の外れ、岩盤が剥き出した崖を背負うように空印寺という古刹がある。

山門を潜って、真っ直ぐ進めば本堂に突き当たる。すぐに左に折れる道を行くと、岩盤に穿たれた横穴へと通じる。そこが八百比丘尼の「入定洞」と呼ばれている。ぽっかりと開いた洞窟の入口には年老いた比丘尼の像があり、八百比丘尼が好きだったという白い椿が植えられている。

今はもう建物があって海まで見通すことはできないが、かつてはこの洞窟の入口に立って先を見れば、そこには青い若狭の海が広がっていたはずだ。今、その海の岸边には、八百比丘尼に不老不死をもたらした人魚の像が置かれている。

八百比丘尼が生まれたとされる遠敷(おにゅう)には、道ばたに比丘尼のものと言われる小さな墓がひっそりと佇んでいる。さらに、この遠敷には、若狭の開祖とされる若狭彦、若狭姫を祭る二つの神社があるが、この二柱の祭神はまさに海からやってきて、その年齢を知る者はなく、不老で少年のようであったという。若狭では、その開祖である神の中にすでに「不老不死」の要素が含まれていたわけだ。

### ●不老不死を求めた者たち●

望まずして不老不死となってしまった八百比丘尼とは対照的に不老不死の秘法を生涯探し続けた二人の人物がいる。

一人は秦の始皇帝の命を受けて、日本にあるとされる不老不死の妙薬を求めてやってきた徐福。徐福は小浜から若狭湾を挟んで西に位置する丹後の伊根という町に上陸したという伝説が残る。

紀元前219年、徐福は総勢3000人の大船団を組んで日本に渡ってきたとされる。その上陸地が若狭であり、徐福によって連れてこられた人たちは、若狭から南下していく途中で、大和朝廷に召し抱えられ、渡来民「秦氏」となる。さらに、そのまま都を通過して南下した人々は、紀伊半島を縦断し、熊野へと辿り着く。

熊野にも、徐福ゆかりの土地がある。熊野市の波田須(はだす)には、やはり徐福の上陸地とされる場所があり、「徐福の宮」という社が祭られている。また、新宮には徐福の墓とされるものがある。

新宮といえば、補陀洛渡海の出発地でもある。若狭に上陸した徐福一行は、不老不死の妙薬を求めて紀伊半島を縦断しながら、一部は秦氏として朝廷の重職に取り立てられ、一部はそのまま熊野へと向かった。そして、熊野で海と出会った一団は、さらにその海の向こうに補陀洛浄土があると信じて渡海していった……そのようには考えられないだろうか。

近畿の五芒星の項で、若狭から平安京、平城京、藤原京、熊野本宮と貫く南北のラインがあると紹介したが、この南北ラインこそ、徐福一行の辿った道ではないのか？ このラインに沿って、不老不死にまつわる伝説や逸話が多数存在することが、それを物語っているように思える。

話を若狭に戻そう。

若狭の不老不死伝説のもう一人の立役者がいる。それは、真言宗の開祖空海だ。日本全国に「弘法大師」として足跡と名を残すこの宗教界の巨人は、若いときには山岳修験に励み、長じて遣唐使として大陸に渡った。そして、彼は他の遣唐使たちとは異なり正統派仏教の経典を修める代わりに、呪術的な色彩の濃厚な密教と錬丹術に没頭した。

神仙術(タオ)や陰陽道にも通じる錬丹術は、西洋の錬金術が様々な非金属や生薬などを調合加工して金を作り出そうとしたように、不老不死の薬を調合加工することを目的とする。その薬を生み出す際に水銀=丹がもっとも重要な役目を果たし、これなくしては調合することができない。西洋の錬金術における賢者の石に相当する物質が水銀=丹であり、当然、良質の丹が求められる。そこに錬丹術という名は由来する。

空海伝説では、空海は今でも高野山奥の院で生き続けているとされる。空海は62歳で入定したが、そのまま霊廟で生き続け、禪定しているのだという。高野山では、維那(ゆいな)という仕待僧がいて、毎朝、霊廟へ食事を運び、空海の世話をしているという。しかし、もう一方で、空海は鬼氣的なまでに不老不死に執着し、鍊丹術を実践し続けた果てに重度の水銀中毒で死んだとする説もある。

後者の説のほうが合理的ではあるが、個人的にはその説も支持しない。たしかに、空海が不老不死を追い求め、その妙薬に欠かせない成分である水銀を求めたことははっきりしている。当然、長い間水銀に晒され、中毒症状もあっただろう。だが、空海は自分が不老不死となることに執着していたとは思えない。それは、空海の著作の中で、再三、薬を使って不老長生を図ろうとする神仙術に対する批判が出てくることでも明らかだ。

いずれ、空海に関しては一つの稿にまとめてみようと思っている。

ここでは、空海はじつは高野山に眠っているのではないということ、全国各地に残る弘法大師伝説は良質な水銀鉍脈を探すために全国に散った「空海一派」ともいえる山師集団があって、彼らが仲間に情報を伝えるために符牒として残したものであろうということ、その二点を提出しておこう。

若狭には三方石観音という空海が一晩で岩に刻んだとされる観音がある。三方五湖のほうから眺めると東に優美な稜線を描く雲谷(くもだに)山の中腹、急坂の参道を登っていくと、赤い涎かけを掛けられた鶏の石像が迎えてくれる。奥には寺の本堂があり、左手に寺務所、右手には木を削って手や足を象った小さな模型が山と積まれたお堂がある。

雲谷山の中腹に立派な花崗岩の一枚岩を発見した空海は、それに一夜で聖観音を彫ろうと決意し、鑿を振った。しかし、あとは右手首を残すのみというところで、夜明けを告げる鶏が関の声を上げる。そこで空海は彫ることを諦めたという。

のちに、それは「片手」観音と呼ばれ、手足の怪我や萎えに靈験あらたかといわれるようになった。本堂の中は、怪我や病が快癒したことを感謝する奉納の提灯が天井を埋め尽くしている。その中には有名スポーツ選手や芸能人の名前も見受けられる。一般の人は、この寺で配られる木彫の手形や足形をもらい受け、それに祈ることで快癒したら、それを奉納する。全国から寄せられた手形足形が、表のお堂を埋め尽くしているというわけである。

これだけなら、よくある開山のエピソードに過ぎないが、空海が花崗岩に彫ったという観音が向く方向をGPSで確認してみると、非常に面白いことが判明する。方位角210度、GPSのコンパスが指し示す先、ここから13km離れた山中には瓜割り滝と呼ばれるやはり空海ゆかりの霊水がある。三方石観音は、明確に次の空海一派にとっての目的地を指し示しているのだ。

石観音のある雲谷山、「雲谷」は鉍山に関係する場所ではよく現れる地名だ。ほとんどの場合、雲谷と書いて「ケラ」と読ませる。ケラとは水銀も含めて貴金属を含む鉍物を採掘してその場で精錬した後に出る鉍屑を意味する。雲谷山に「くもだにやま」以外の別名がないかと調べてみると、昔は「キラ山」と呼ばれていたことがわかった。たぶんそれはケラの訛化したものだろう。

石観音の境内の片隅には朱色に染まった御神体とされる滝がある。雲谷山に発するこの水は「延命水」と呼ばれ、これが病や怪我を癒すとされる。

空海が花崗岩に彫りつけた片手の観音が指し示す先にある瓜割り滝の周囲の岩も目に眩しいほど見事な朱に染まっている。さらに、瓜割り滝から5km離れた遠敷の神宮寺には、閻伽井(あかい)がある。寺の境内の片隅にコンコンと湧き出すこの泉もまた岩がすべて朱色に染まっている。

水銀は鉍床では硫黄と結びついて硫化水銀という形で存在する。硫化水銀は見事な朱色が特徴で、古来日本では「辰砂」

や単に「朱」と呼んできた。そしてこれが含まれた鉍脈を通して湧き出した水は不老長寿の霊水と考えられていた。神宮寺の閻伽井は「お水送り」という行事で知られている。

そのお水送りの祭りには、2007年と2009年の二度参加した。これは、実に奇妙な祭りだ。神仏が混交した若狭神宮寺の堂の中に、修験者やら咒師(すし=陰陽師)やら法師やらが籠もって般若心経を唱え、さらに祝詞や不思議な呪文を上げて、神宮寺がたちまち炎上するのではないかと思えるような大松明に堂内で火をつけて駆け回る。そして、その火を押し頂き、表に出ると、境内の大護摩にこれまた鉍やら刀、弓やらで四方固めして点火する。

松明に先導されて境内の傍らに湧き出す「閻伽井」から汲まれた水が神宮寺の前を流れる遠敷川の支流に沿って、上流へ運ばれていく。

境内に参集した善男善女たちは、おのおの大護摩の残り火を手松明に受けて、清められた水「香水」の後に続いていく。平日だというのに3000人近くの人たちがこの祭りに参加し、川に並行して長々と火の川がうねって行く。

神宮寺から2kmあまり上流の「鵜の瀬」という淵に達した香水は、赤々とあたりを浮かび上げる護摩と松明の火に照らされ、ここから注ぎ込まれる。このとき、水を注ぎ込む水師や修験者、咒師といった儀式の主役たちは、いずれも白装束に白い頭巾を被り、顔は白布で覆面している。

今は、この祭りの由来や作法も公になり、こうして観光客を集めているから、その装束や作法を見ても「不思議」という感慨をもたらすだけだが、これが「秘儀」として行われていた頃に、たまたま出くわしたとしたら、見てはいけないものを見てしまったと、トラウマになってしまいそうだ。はじめてその装束を目にしたとき、アメリカ南部の白人至上主義ファンダメンタルのクークラックスクリンの儀式を即座に思い出した。

鵜の瀬から注ぎ込まれた香水は、10日を経て奈良東大寺二月堂下にある「若狭井」に湧き出し、ここから汲み上げられて、「お水取り」の儀式が行われる。

今では、奈良東大寺のお水取りは有名だが、それに先立つこの「お水送り」の儀式が行われていることは、あまり知られていない。お水取りでは、そのクライマックスシーンとして、大松明を二月堂の中で振り回す「達陀(だつたん)」の儀式が有名だが、これは単にそれを見学できるだけなのに対して、お水送りでは、達陀を見学した後に、その火を手松明にもらい受けて、香水に従っていく。文字通り祭りに参加できるわけで、よりこの祭りの神秘性に自分が寄り添っているという実感が持てる。

07年に参加したときは、ちょうど満月の晩に当たり、月と松明の火の対比がより神秘さを深めていたが、09年は細い下弦の月が漆黒の空に微かな傷をつけたようになって、全天を鮮やかな星辰が埋め尽くし、これもまた壮大なこの祭りのイメージを掻き立てているようだった。この祭りは、東大寺二月堂のお水取りと合わせて、インドから渡来した「実忠」が752年に大仏開眼供養に創始したと伝えられている。

実忠という人は、一説にはペルシャ人であるともいわれ、この儀式の中にゾロアスター教の作法を取り入れたとも推測されている。ゾロアスター教の中でも、もっとも重要な拝火の儀式は「ダツタン」と呼ばれる。そのことから、お水送りとお水取りは、ゾロアスター教の影響が強いと考えていいだろう。

実忠も徐福と同じく遠い海の彼方から若狭を目指して渡来した人間であり、若狭に眠る不老不死のエキスの存在をはじめから知っていたと考えられる。

実忠は自分を見いだし、取り立ててくれた若狭出身の良弁の補佐として東大寺に色濃い影響を残した。しかし、東大寺初代別当に就いた良弁の後を継いで別当となることはなかった。その代わりに、時代的に実忠と重なる空海が、東大寺の第14代別

当となり、実忠の創始した儀式をも受け継ぐことになる。実忠は正真正銘の渡来人であり、空海もまた遣唐使として大陸に渡り、彼の地で錬丹術を修めて帰国した一種の渡来人であった。

実忠も空海も(そして徐福も)若狭が不老不死の伝説に溢れた場所であり、ここに産する水銀=丹が非常に良質であることに注目していた。

彼らが完成させた「お水送り=お水取り」という儀式は、文字通り若狭遠敷の丹を奈良へと送ることを目的としたものだったのだ。そして、前述したように、このお水送りの若狭と奈良を結ぶラインは徐福の熊野へ向かうルートと一致している。

空海が足跡を残した場所で不老長寿の霊験が伝わるところには丹生(にゅう)という地名の場所が多い。

その最たる場所は高野山周辺である。

ここは元々丹生津姫という神を祭る聖域だったが、空海はこの地に眠る水銀に目をつけ、丹生津姫を祭る神社を分断してその中心に金剛峰寺を置いた。そして若狭にも丹生という地名が散見される。

若狭の水銀産地の中心である遠敷(おにゅう)=御丹生と後に空海の本拠地となる高野山にも密接な関係があるのは明白だ。

## ●神々の宿る場所●

近畿の五芒星の中心を南北に貫くライン、そのラインの北に位置する遠敷には、八百比丘尼の生地があり、若狭彦と若狭姫を祭る神社があり、ラインに沿って若狭と奈良を結ぶ「お水送り」というマジカルな祭りがある。いずれも「不老不死」をキーワードとする。

若狭から熊野へと続くこのラインそのものが不老不死にまつわる多くの物語を紡ぐ縦糸となっているわけでもあるが、若狭周辺は、いまだに不老不死伝説が色濃くそして数多く残されているという点で突出している。

それは、若狭が大陸からの玄関口であった名残が大きいのかも知れない。

若狭の不老不死伝説のコアともいえる遠敷から真北に19km、五芒星を貫く南北ラインの北端には、御神島(おんがみじま)が浮かんでいる。ここには、「朝日さす入日かがやくその浦に黄金千枚朱千枚」という不思議な唱え歌が伝えられている。この唱え歌がいつ頃から伝えられてきたものか定かではないが、地元では、御神島のちょうど真ん中付近に島を貫く洞窟があり、一年のある特定の日に若狭湾の向こうに沈む夕日の光が一瞬だけこの洞窟に差し込んで島を貫通すると言われている。

この島に向かってまるで触手を伸ばすかのように細長く伸びる常神半島。ここには、常神、神子といった「神」のつく地名が多く、さらには「龍宮」という人魚伝説を連想させる集落もある。かつてはこれらの集落に行く交通手段は舟以外になく隔離された土地であった。

そして、この地に住む漁民はもちろん外部の人間も、この半島のほとんどの場所と御神島を神々の住む場所として聖別し、滅多に立ち入ることはなかった。それは現在までも続き、御神島は原生林に覆われた無人島であり、常神半島も人の住む西側の一部の入り江とそれに沿った道路以外には未だに人の手は入らず、原始の森に覆われている。

常神と神子にはそれぞれ古い社があつていずれも海を向いている。不思議なのは常神、神子だけでなく常神半島に点在する名もない祠もすべて海神を祭るのは当然としていずれも二番目に合祀しているのが大山祇神であることだ。ところが、この若狭が良質な水銀鉱脈が眠る場所と知れば、鉱山の神である大山祇神が祭られていることも腑に落ちる。

日本の神々は、山や海さらには動物や天然資源などを象徴し、個々の土地に秘められたものを神社に祭る神に仮託することで、

それに精通した者だけが理解できる暗号ともなっていた。常神半島では「不老不死の秘薬」の元である水銀が眠る特別な土地であることを土地の神社に祭った大山祇神(おおよまづみのかみ)に暗示していたのだ。

ところで、先に挙げた唱え歌だが、「朝日さす入日かがやくその……」というフレーズは、黄金伝説にまつわる唱え歌としてはありふれたものだ。同じフレーズではじまる歌が、黄金伝説とセットで全国各地に伝えられている。だが、この御神島の場合は、不老不死伝説が色濃く、さらに五芒星を南北に貫くラインの突端であるといったことが、ただ単に、ありがちな黄金伝説として片付けられない何かを感じさせる。

御神島は五芒星の真ん中を貫くラインの頂点に位置するわけだが、この島と空海が一夜にして石に観音を刻んだという三方石観音との位置関係に目を向けると、また面白いラインが浮かび上がってくる。

御神島にはかつて常神社の奥社が置かれていたが、その位置は北緯35度37分55秒、東経135度48分16秒となる。三方石観音の本尊の位置は北緯35度33分46秒、東経135度54分55秒。御神島から三方石観音を望んだ方位は127度となる。

このラインをそのまま南東へ伸ばしていくと、琵琶湖に浮かぶ竹生島の都久夫須麻神社に突き当たる。竹生島は「財宝」と芸術の神である弁財天が宿るとされる島であり、しかも御神島と竹生島はその形が極似している。そして、もっとも興味深いのは、御神島から見て三方石観音、竹生島の方向は、冬至の朝日が昇る方向にほぼ合致することだ。逆に竹生島から御神島の方向は夏至の太陽が沈む方向に合致することになる。

冬至の朝日が竹生島から三方石観音そして御神島と結び、島の洞窟を貫通する。逆に夏至の入日は西側から御神島を貫通し、それが三方石観音と竹生島を結ぶ。それぞれの太陽の光を眩しく見つめる浦……それは入り組んだ海岸を持つ常神半島のそれぞれの浦であり、そこには大山祇神を祭った社が鎮座している。

常神半島に眠る黄金とはいったい何なのだろうか……。